復讐鬼と殺人鬼と魔法使い

霊解

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
復讐鬼と殺人鬼と魔法使い

【Ｎコード】
Ｎ３３３６Ｎ

【作者名】
霊解

【あらすじ】
――　目には目を、歯には歯を、殺しには殺しを　――
自分を殺したヤツを殺し、魔法先生ネギまの世界に生まれ堕ちた一人の殺人鬼。魔法という存在に出会った彼がその世界で今度は何を殺すのか？

この作品は作者の偏見や独自の設定などが含まれてます。原作重視やオリキャラ嫌い、という方はご遠慮ください。

プロローグ　目が覚めたら俺は・・・・ってね（前書き）

新作始めました。ちょっとした気分転換です。
なので更新が不定期になるかもしれません。

プロローグ　目が覚めたら俺は・・・・ってね

些細なことで物語は始まる。

「あっ、しまった！！」

インクがこぼれ落ちた先は、ある名簿。

そこにはある名前がかかれていた。

「安危（あんき）キョウ」、と

――――目が覚めたら俺は・・・・ってね――――

ここはどこだ

ああっ、イライラする。

本当にどこだよここ。

もういいや、寝よ。イライラするし。

「ね、寝るんじゃないっ！」

「ああ？誰だテメーは。人に命令してんじゃねーぞ」

人様に命令するなんていい御身分なこった

とりあえず起き上がるか。ふぁぁ～、ああ寝み

「んで、あんた誰？」

「わしか？わしはカ・ミ・サ・マじゃぁ（ビシッ）」

変なポーズをとりながら爺が答えてきやがる。

ウッッゼ。

「ダイジョウブか？」

いろいろと

「な、なんじゃその憐れんだ目はっ」

爺さんになると周りに誰もいなくなるから気を惹こうして変な事をしだすなんて前聞いたなぁ

ま、こんな爺にはなりたくないものだねぇ～

「なんかわしめっちゃかわいそうな存在になっとる？」

「うん、病院行け。精神科な」

「あれれ、神様もしかしてジョークな存在になっている？」

「うん、病院行け。精神科な」

しかしここ本当どこだ。こんなとこ来た覚えねーぞ。

しかも全裸だし。

「んで爺、ここどこだ。」

のの字を書きながらいじけていた爺がいきなり飛びあがりやがった。

まったく人間一人になるとほんとかわいそうなことになるんだな。

「ん～ここはな、まぁ、いってしまえば世界の狭間かのう。」

「・・・はぁ、もういい。それで何で俺がそんなとこにいるのさ」

「あ～、それがのう、うっかりお主殺してしまったらしい。」

世界が止まった。

コイツなんて言った？

殺した？

誰を？

俺。

俺？

俺を？

俺を殺した？

そういったのかこの爺は？

殺したって言うのか俺を？フハハハハハハ

気づくべきであっただろう。目の前の男、キョウがわらっているのを。いや、初めからずっと笑っていたのを。だがここにきてその笑顔に変化が現れた。今までの能面のような笑顔とは違う、どこか狂気を宿した笑顔のような、それでいて新しいおもちゃを手に入れた子供のような無邪気な笑顔であった。

「いやぁ、すまんのう？。うっかりも怖いの。まさかあそこにインクがあるとはな。まったく誰じゃあそこにインクなんか置いたのは

？あはははははは」

目の前の男の変化に気づかず笑う。嗤う。

この爺は知らなかった。

目の前の人物がどのような人物か。

死ぬまで何をなしてきたのか。

この爺は知らなかった。

自分がどれほど愚かのことをしたのか。

無智は罪だ。

「それでのぅ、さすがにそれじゃ悪いんでの違う世界に転生してもらおうと思っとる。いやぁわしっていい奴じゃね？」

「・・・・・・あんたさ」

「ん？もしかしていきたい世界とかあるのか？おお、なら言っておくれ、わし的にはこんな世界がいいんじゃが？」

そういい爺は目の前に漫画を数冊だした。

キョウは知らなかっただろうが、それはまだ彼が生きていたころに流行っていたものばかりだった。

「いやぁ、わし最近ハマってしまっての。特にワンピとかよくね？」

「・・・・・・どこだっていいさ」

「おお、そうか。どうしようかのう、う～～～ん。」

「・・・・・・・・・あんたが、俺を殺したのか？」

「へ？そ、そうじゃ。済まなかったの。」

「・・・・・・・・・そうか・・・・俺を殺したのか」

「な、なんじゃお主？だ、大丈夫か？」

「・・・・・・していいのはな」

「ん？」

「俺を殺していいのは」

「俺だけなんだよッ！あはははははははっ！」

……
いつものように小太刀を手に目の前の人の獲物を盗った馬鹿を解体しなくては

「な、なんでお主小太刀なぞ持っておる。この空間はいわば魂だけが存在できる空間じゃぞ。そんなもの存在できるはずがないっ！」

「さぁね？もしかしたらこの小太刀も俺の一部なんじゃない？ま、そんなのどうだっていいよ。興味ないし。それより抗ってみなよ。このまま解体したんじゃ面白くないじゃないか。俺を楽しませろよ。あんたにできるのはせいぜいそのくらいだろ。」

そういいながら駆ける。常人より早い程度だ。キョウはただ一点を除けば普通の人間だ。彼の殺人衝動を除けば。

「お、おのれ。たかが人間が図に乗りおって。」

光球を両手から出しながら迎撃する。キョウは見たこともない事象に驚くがそれについて考えるよりも早くそれを避け、なお爺を解体するために駆ける。

「あははは、いいね。いいね、こういのも悪くないんじゃないかなぁぁぁあああああ。」

自分のリーチ内に爺が入った。

一閃

もちろんキョウは刀の扱いに関しても素人だ。だが、いかんせん斬撃が早い。

その結果

ザシュゥゥゥゥ

爺の胸のあたりを切ることに成功した。血が噴き出す。

「が、がああぁぅうぅぁぁぁぅぅうううあああああああああああ」

痛みに対して免疫がないのか。痛みに過剰に反応する。

「おいおい、こんなんじゃつまらないだろう。自称でもなんでもいいがカミサマなんだろ。もうすこし面白くできないのかよ。」

「グッ。ハア・・・ハア。き、貴様。ふざけおって。こちらの落ち

度もあるから手加減しておればいい気になりおって、わしにこのような傷を負わせるとは万死に値する。」

そういった瞬間、やつが何かをした。俺の周りの何かが変わった。わからない。とてもじゃないが理解できそうにない。とにかくこの場所から動こう、そう思った瞬間だった

――ボトッ

なにかが落ちた。俺から何かが落ちた。わかっている。なにが落ちたかなんてわかっている。

だが、まだ脳が理解してない。

それならやりようがある。

来るッ！

「！！ッッッッッッッッッッッッッッッッッッッッッッッッッッッッッッッッグゥゥゥゥゥゥゥゥウッ。」

なんとか歯を食いしばり痛みに耐える。来ると分かっているならまだ対処できる。

下に落ちているのは

さっきまで俺の両肩についていた、

俺の両腕だ。

もちろん、小太刀も落ちている。

幸いなのは小太刀が地面に突き刺さって立っていることだ。俺の右腕も一緒についているが。

もし転がっていたのなら拾える術はない。

すぐに口で小太刀の柄の部分を銜える。

「フォフォフォフォフォ、いい感じになったのう。」

俺のすがたを見ながらそんなこと言っている。

傷はもう治ったようでほとんど大丈夫なようだ。

これまでの摩訶不思議な出来事を考えるとカミサマってのもあながち間違いでもないのかもしれない。

だけどそんなの関係ないんだな、これが。

俺はアイツを殺す。

それは決定事項だ

「そろそろお主には消えてもらう。まったくわしの言うことを聞いておればよいものを」

どでかい光球を上空に集めやがって。どこの元気玉ですか

さっさと殺さないとやばいな。

ここからがキョウという人間のツヨサが出てくる。

彼は普通なら元気玉もどきに恐怖し逃げるところを、そのまま爺に突っ込んだのである。

ましてや彼はいま両腕が無く痛みが継続的に波になって襲ってきている状態である。そんな状態で彼は突っ込んだのである。

彼の執念である。もちろん「勝ち」への執念ではなく「殺し」への執念である。

まさか突っ込んでくるほど元気があるとは思わず爺はあわて始める。

「ま、まだ動けおったのか、貴様ぁ」

彼は口の小太刀を刃を上にして突撃のスピードを緩めず爺の喉に刺す、そしてそのまま顎力のみで上方へ振りぬいた。

そんなことすれば小太刀の刃は欠け、彼の顎は無事では済まないだろうが、彼が今いる空間は魂のみが存在する空間。

ようは気の持ち様によって、ある程度の負荷が軽減されたのだ。キョウはそれに気付いたわけではなく、執念のみでそれを行ったの

だ。

そしてそんな斬撃を受けた爺は、倒れずに喉から真っ二つになっていた。

血が噴き出しており、それがキョウにかかる。

だがそれでもまだ生きてはいるようで

それに気づいたキョウはすかさず心臓部に小太刀を刺そうとする。

「カミをも殺すか。お主は。」

喉を切られて声が出せないはずなのに、そんな声が聞こえてきた。

「まったく、とんだ貧乏くじじゃい。まぁ、近頃飽きておったところじゃ。ここらで一辺人間に殺されてみるのも面白いかもしれんのう。しかしわしの核が心臓にあるとよくわかったのう。まったく、運のいいｙ」

それを聞いた瞬間キュウは躊躇なく心臓を刺した。

小太刀を抜くと爺の骸がいきなり光り出した。

だんだんと光量が増え、ついにはキョウも巻き込んだ。

そして光が消えたころにはそこには爺の躯とキョウの両腕だったものしか残っていなかった。

プロローグ　目が覚めたら俺は・・・・ってね（後書き）

どうも作者の霊解です。

ついにはじまりましたこの作品。
前々からネギまを書いてみたかったんですが、いろいろあってやっと書きだすことになりました。

内容のほうはいきなりまさかの神殺し？ではじめました。結構インパクトあるかなって思ったら、似たようなはじまり方がありました。すいません、でもパクリとかじゃありません。多分。

今回は転生物なんですが
能力とかを神様からもらって異世界へレッツゴー、という流れがテンプレ化してるんで、あえてその流れに乗らず今回のような流れにしました。

魂って結構あいまいな言葉だから使うのが便利な半面、皆さんが同じフィーリングで受け取るかも少し不安ですね。

キョウに関してはもう少しキャラが増えたらキャラ設定で話そうかなと考えてます。

ネギに関しては結構アンチになるかもしれません。

あとヒロインに関しては刹那と、真名にしようと思ってます。

そういえば今週号結構すごいこと発覚してましたね。
この二人は確か同居人ですよね。

部屋割って
やっぱ混血は混血同士でまとめたのかな？
でなかったら護衛の刹那をこのかを普通離しませんよね。

作品に関する指摘、改良点、質問などあったらバンバン送ってください。お願いします。

第1話　はじまりはいつもってボクはね（前書き）

いつも思うんです。

なんでおれこんなに文才ないんだろうって。

ちくしょう

第1話　はじまりはいつもってボクはね

生まれて自我が出来始めてすぐわかったことがあった。

この世界でボクは異端だってこと。

――――はじまりはいつもってボクはね――――

父さんと母は異端だった。

父さんは人間ではなかった。

母は禁忌とされたハーフ。

父さんと母は一人だった。

二人で一人だった。

互いに依存しなくちゃ生きていけなかった。

そんな二人の間にボクが生まれた

父さんは竜人の一族の出だった。寄って父さんも竜人のはずだった。だけど、生まれた父さんの姿はだれも予想していない姿だった。父さんの姿は悪魔に似ていた。いや、悪魔といったほうが納得できる物だった。だがそれだけなら誰も拒絶しなかっただろう。姿が違うのは恐怖の対象になるが、まだ乗り越えられるものだ。だが父さんはそれだけじゃなかった。父さんは、生まれて数時間で二足歩行をし、数週間で一般男性を同じ知性を持つまでに至った。

それから父さんの苦悩は始まった。毎日一族のみんなから石などを投げられて育った。唯一父さんの長身がのみが父さんと喋ってくれた。話をしてくれた。父さんと対話をしてくれる。それが少年だった父さんにはひどくうれしく、幸せを感じられる時間だった。そ

のうち父さんの世界は家の中だけになった。いくら知性だけが成長してもココロはまだ子供だ。生まれてからいじめられて来たのに耐えられなかったのだろう。だが家から出ることのなくなった父さんは知らなかった。父さんだけがいじめられていたのに。

父さんが少年から青年になるころ一つの事件が起きた。どの世界にもありふれた事件。父さんの両親、つまりボクの祖父母、が首を吊った。アクマを生んだとして両親が迫害されていたのを父さんは知らなかった。標的は父さんだけだと思っていたのである。

父さんの世界は壊れた。そして一族から追い出された。それから母に出会ったらしい。

母は悪魔と人の間に生まれた子供。どちらからも受けいられなかったらしい。全部父さんから聞いたことだった。詳しくは知らない。だって母はそれを話す前に亡くなったから。もともと悪魔の血と人間とは相反するものであり、母のような子供が生まれるのは奇跡であり、いままで生きてこれたのがおかしいらしい。そしてボクを生んで数年して死んだ。父さんが言うには満足した顔をしていたらしい。

ボクは生まれてから何として生きタラいいのかわからなかった。父さんは竜人で母は悪魔と人間のハーフ。ながれている血は何一つ統合性がなかった。ボクの体にもそれが反映されているのかわからなかったが、身体能力がデタラメだった。父さんも十分デタラメだったらしいが、それを超えている。血はボクの外見にでていた。ボクの外見は普通の人。これは母の血が色濃く出たのだろう。父さん

はなぜ竜人の血が出なかったのか、不思議がっていたが。だが肩から両腕が竜人の腕だった。ただわからないことがあって肩からくっきり分かれているんだ。どうしてだろう。

何はともあれボクと父さんの姿は目立ちやすいのでイギリスの山奥に住むことにした。

二人で山奥に家を作り、畑を作り、狩りで動物を狩り、と自給自足の生活だったが楽しかった。

そしてボクが１２のころ事件が起きた。ボクの世界を変えるほどの事件が。

近くの村が悪魔に襲われたらしい。ほんとにそれだけの事件。ボクたちには関係なさそうなので無視していたんだ。

だからおかしいんだ

関係ないはずなのに。

ボクと父さんは普通に暮らしていけるはずだったのに。

それなのにボクの目の前で

父さんが赤毛の魔法使いに殺されたのは。

その時ボクの中で［キョウ］という存在が起きたんだ。いや覚醒した。

今思うにボクは自分の精神世界に落ちたんだろう。

そこでキョウにあったんだ。

「よう、やっと来たか。」

「な、何のことですかっ、個々はどこですかっ、早く、早く父さんを助けないと、まだっ、まだ助かるかも。」

「・・・・お前は戦えるのか。」

「戦えないけど、でもっ」

「あの魔法使いを倒せばいいんだろう。おれがやっといてやるよ。」

「父さんを助けてよ。」

「・・・・・・ガキ、この世には壊れないもんなんてないんだ。それは命にも言えることだ。一度壊れたらもう戻らない。理解しろ。・・・・・・・・俺はお前の親父を助ける事が出来ないかもしれない。

」

「そんなっ！そんなのないよっ！ボクたちはただ普通に生きたかったのに、関係ないのにっ」

「・・・・・・・この世で不幸は誰かれ構わず理不尽に降りかかる。だが、それを仕方ないとあきらめるのか？」

「うぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ、うあああああああああああああああああああああああああああああ」

「そこで泣いていろ、お前はまだ弱い。何をするにしても弱すぎる。だから俺があの魔法使いをコロシテクル。今ならそれくらいなら無料だ」

それから何が起こったかは知らない。

目が覚めた時はすでに夜だった。

あの魔法使いはいなかった。

だけど魔法使いの腕が千切れて落ちていた。

多分キョウがやっとのだと思う。

そして

父さんの遺体を見た

父さんの遺体を見たときボクの中に有り余るほどの憎しみがあふれた。

ボクにはなぜ力がないのだっ！。

なぜあの魔法使いは父さんを殺したっ！。

あの魔法使いは殺す。

魔法使いはコロス

コロス。

復讐を誓った。

父さんが望まないのだって知っている。だが、少なくとも自分のためにはなる。このことをしょうがないと、仕方ないと受け入れたらボクは多分これから何一つ貫けない。だから徹底的に抗ってやる。

キョウが言うには父さんは死ぬ瞬間までボクの心配をしながらも母さんに会えるとつぶやいていたらしい。

言うまでもなく父さんは多分母さんが死んでから半身を失ったようなものだったんだろう。死ぬに死ねず、それでも今回そんなしがらみから解放されたのかもしれない。

父さんは親であろうとした。ボクから逃げなかった。父さんの事情を胸の奥にしまって最後まで親であろうとした。だけど、やはり母さんに会いたかったんだろう。別にそれをボクは、裏切られたとか恨んだりしない。少なくとも父さんは僕の親だった。それで十分だ。

そのあと父さんの遺体を埋めて墓を作った。

見晴らしのいい丘に母さんの遺骨と一緒に埋めた。

多分二人一緒にいられるだろう。

数少ない両親との記憶では、

いつも二人一緒にきれいに笑っていたのだから。

第1話　はじまりはいつもってボクはね（後書き）

名前が、名前が出てこない。畜生。

また名無し状態が続くかも。

キョウはイメージしやすいんだけど、

今回の名無し君はイメージしにくいな。

これからどうしよう。

原作開始には１８ぐらいですね。

この年齢なら一応自由が利くかな程度に考えました。

名無し君の父親殺したのは、ご存じ英雄ナギ・スプリングフィールド。

読んでて思ったんですけど。紅き翼の連中って基本感情で動いてますから事故とか起こっても不思議じゃないですしね。

まぁ最初はこんな感じで行きます。

次かその次には原作に入るつもりです。

それで早い段階でなんですけど

アンケートです。

キョウの使う武器は小太刀できまっているんですが

今回の名無し君はまだ武器が決まってません。

なので使用武器募集中です

期間は８／２７までです

作品に関する感想、批判、指摘、質問などよろしくお願いします。

キャラ設定（前書き）

れッつ厨二全壊っ！

９／９　キョウのイラスト追加。

キャラ設定

安危キョウ

一応主人公？
カミに殺され、それに怒りカミを殺した男。感情がないかのようにいつも笑っており、友人等は目から表情を読むようにしている。おかしいほどの殺戮衝動を持っている。

カミに殺されて殺した後は気づくと雄利の体にいた。ただし雄利がキョウの存在を認知しないと表に出れなかったようで認知するまでの１２年間、自分の能力などについて考えていたらしく、とくに退屈しなかったらしいがその間にたまった殺戮衝動を消化できずに困っていたらしい。

外見

生前
どこにでもいる一般日本人。大学生。ただしいつでもなんらかしらの笑みを浮かべている。
黒髪黒目。身長は平均的

死後、転生後

人格が表に出ると肉体が変化する。生前の姿になるのだが、最初に人格が表に浮かびあがったときに子供の体から一般的な男性に変化すると多大な負荷が体に蓄積されることが分かってからは、年齢に

あった体に変化するようにしている。
またカミとの戦闘で両腕を切り落とされたので両腕に関しては外見が竜人の腕となっている。これは魂レベルで両腕を失ったので体は自分の物であったが腕は他で補う必要があったので雄利の身体で構成されているためである。

性格

殺戮衝動などに関する点をのぞいたら一般的。
刹那的な快楽を求めるたち。
過去にいくつもの殺人を犯してきたが、そのどれもが発覚しなかった。完全犯罪をするのも好きだが殺すことだけを目的としているため、仕掛けによる殺しは好まず、自分で殺さないと気が済まない。
彼が殺すのに拘る理由は自身を壊すもの（破壊者）として認識しているからである。幼少から作るより壊すほうが楽しいという考えを持ちつづけ昇華した結果、それが異常な殺戮衝動につながったのである。
（つぶやき：めだかボックスの宗像形とかぶってね？）

ただ誰構わず殺したいのではなく標的を絞っている。自身、両親、などなど。
また殺すという行為を何かを戻せないほどに壊すことと考えており、対象物が人間のみとは限らない。
カミの血を魂レベルで浴びたために人間ではない。また、自分の記

憶がところどころ欠けている。

能力

『進化』状況に適応する力。いく年と掛けて生物が状況や環境などに適応するのを一瞬で行う力。ある意味生物の神秘をコントロールできる。
この力で雄利の体のバランスを保ち結果的に存命させることに成功している。

『小太刀』魂の一部となっていた小太刀。そのため呼べば現れるのだが、それはもともとキョウが持っていた小太刀の複製といってよい。これは完全に魂の一部になってしまったものをキョウが魂のみの世界での感覚で呼び出したので、小太刀が存在する必要があったので、複製を作る能力と言っていいものになった。何本でも複製でき、物理法則びっくりの能力。
ちなみにこの小太刀は生前の彼の家にあったもので一家に伝わるものらしい。

イメージとしては
＞ｉ１１１３６２―１１９７＜
＜小太刀を構えているイメージです。腕は一応竜人の腕ということで緑色にしたんですけど、もっとひねればよかった＞

雄利・Ｌ・レイ
（Ｙｕｒｉ・Ｌ・Ｗｒａｙ）

母親が日本人の血をひいていたので名前は日本語。ただし父はユーリーと呼んでいた。
ファミリーネームは父親から、ＬはＬａｗｒｉｅの略。とくに意味はない。

もう一人の主人公。

ある意味生きているのが不思議な体をしている。血が反発していつ死んでもおかしくない体だったが、キョウが内側から進化させてその爆弾を取り除いた。

実は平行世界のキョウの後世というべき存在。なのでカミは彼の体にキョウの魂をリセットして突っ込もうと考えていた。結局カミは殺されたため神が出来たのはキョウの魂を異世界に飛ばすことのみ。キョウの魂は導かれるように雄利の体に宿った。ここで雄利の魂を取り込みキョウが体の主導権を握るはずだったがキョウが魂レベルで人を超えていたので雄利と融合できなかった。（水と油のような感じ）

結果雄利の体は二つの魂を内包する事になった。

外見
身体に１／４しかながれていない人間の血が色濃く出た。特に目立つわけではないのだが、顔は整っている。身長は平均以上で体も出来上がり始めている。両腕に関しては父親と暮らしていたときには気にする必要がないのだが、それ以降は旅に出たので包帯を巻いた

りして隠している。

性格

生まれのせいか、自分のこと以外にはあまり興味を持たない。他人との交流にはあまり気が載らない。自分の生まれをさして不幸と思っていない。だが目の前の不幸を受け入れることは絶対にしないた性質。また、彼はい自分を含めた人間、命を理解できない。両親を誇りに思っており、それをけがした赤毛の魔法使いは絶対に殺すことを誓っている。

能力

『波動』波を操る力。暗殺に向いており、自身の姿を消し、音も消すことで、大半の認識の要素を消すことが出来る。それ以外に、超振動などを起こし体に刀に近い切れ味を持たせることもできる。この力は事件後使えるようになったので雄利は絶望がトリガーになったのではと考えている。

桜咲刹那

雄利に好意を持っており、それを自覚している。ただそれを伝えるのには躊躇している。
雄利が助けた半妖たちの一人。事件のさい反抗したが何もできず、自分の無力さを常に意識している。
また、その外見上うまく半妖たちともなじめずにいた。そのため京都では話す人が雄利、キョウのほか数名になってしまっていた。
またこのかに関しては自分が強くなってまもると小さい時に誓った

が、先の事件で自分にはなにも守れないのかもしれない、と思っておりそれゆえあまり考えないようにしている。

近衛詠春

魔法界では英雄。また紅き翼では今は亡きガトウにつぐ常識人。雄利の目的も知っており自身の罪を自覚しており、そのため何気に雄利の願いをかなえてやろうとしている、ちょっといい人。ただキョウに関しては問題ばかり起こしていたのでもみ消すのが面倒になったので雄利を関東によこした。また、このかに魔法を触れさせたくないと思っているが、それも無理なことと理解しており、いつかは明かす気でいる。

キャラ設定（後書き）

神をカミと書くのは神と書くのがなんかいやだからです。うん。

イラスト、設定画を描くべきか？

正直最近書くのはいいんですけど、取り込みが面倒で。

ちなみに私はアナログ派なので、手で書いた、スキャナでコピって

それで色付けしてます。

めんどい。

ペンタブ欲しいな。

それか誰か描いてくれ（笑）

第2話　めんどうだと思う、俺は・・・・ってね（前書き）

久しぶりです。

今回はぐだぐだです（ビシッ

え、いつもぐだぐだだって

・・・・・・・だね。

第2話　めんどうだと思う、俺は・・・・ってね

「ねぇ、キョウ？」

「ん？」

「あなたでしょ、●●君を殺したの？」

「あれ？何でわかったの？」

「だってあなた、私も殺したじゃない。」

「そうだっけ？」

「そうよ。あなたは忘れっぽいものね。だからね、これからあなたが殺す人たちのことを全部私が覚えといてあげるから、だから、これからもいっぱい殺してね。」

「当然」

――――めんどうだと思う、俺は・・・・ってね――――

ｓｉｄｅ　ＫＹＯ

・・・・目が覚めた、いや強制的に覚まされたか、

雄利が無茶やったようでこの周りの樹があらぬ方向に折れていたり切れていたりする。

しかし俺は夜行性じゃないんだがね。何でいつも夜中にぶっ倒れてくれるんだかね雄利君は。

まったく無茶をする。

あいつには死なれては困るんだ。俺もまだ死にたいわけじゃない。どちらが欠けてもだめらしい、といっても俺の勘だが。

ちなみにあいつはまだ自力で俺らの精神空間にたどりつけないでいる。あそこで体鍛えたほうが効率がいいのにな。

精神空間を通してでないと俺らは意志の融通が出来ない。

しかし、そうか、もうアイツはいないのか。

どうしようか、まだこちらで何一つコロシテナイ。

あの赤毛も殺し損ねた。久しぶりの殺しに少し浮かれていたのかもな。

やはりアイツがいないとペースが崩れるな。いつもなら「現在のコロシタ数は・・・・」とか「今度はどんな殺し方するの？」とか言ってウザッタらしく付きまとうのに。

まぁ、いないものはどうだっていい。いないのなら代わりを用意すればいい。

そうだな今日はこの体の検証でもするか。特にこの両腕。

精神空間では俺の魂は両腕が欠けている。なのに表に出ると両腕があり、それを動かせる。面白いね。

思うに俺のこの両腕は唯一俺の体で雄利の体で形成されている部分。

つまり俺の力でこの両腕を進化させるとそれが雄利にフィードバックされるかもしれない、ってことだけど、あまり考えなしにやるのも問題だ。

まぁあまり意味のない

それでこの腕なのだが、やはり俺のじゃないからいささか反応が悪い。これは俺の体が常識的にあり得ないほどの強度と身体能力を得たからなんだろうが。雄利自体は身体能力の面でなら人とは比べ

物にならないが、俺と比べるにはあまりにも卑小だ。つまるところ、俺はこの両腕は使えるが鍛えることが出来ないってことだ。まぁ、雄利に頑張ってもらおう。

そして俺の能力『進化』

名前が若干・・・いや、かなり安直だがこの能力はひどくあいまいな力だ。

進化と名づけたのは、実際に使える部分が対象物を進化させるということだ。だが他の部分は存在を認知できるがそれらがなにかなのか理解は出来ていない。まぁ、対象物の進化だけでも十分すぎる能力なのだが。

この進化、実は方向性をつけられることに最近気づいた。

要は退化させたり、攻撃面での進化、身体と精神面の融合などなどいろいろ出来るらしい。

この間、試しに近くにいたネコを進化させてみた。おどろいたね、いきなり二本足で立ち俺のいってることを理解しているようだった。まあ、言ってみればア○ルーのようだった、ってことだ。ところでア○ルーってなんだ？

まぁそのまんまってわけにもいかないので退化して戻しておいた。

ただしこの能力進化させる分に比例した多大なエネルギーを消費するから、あまり短期間に多用は出来ないんだがもともと戦闘能力でもないし気にするほどのことでもない。

まぁ、能力に関してはこんな感じかな。

ちなみに俺らは、といっても雄利が決めたんだが、日本の関西呪術協会に向かっている。

雄利は復讐する気満々でね。正直どうでもいいんだが、俺に相談なしに決めるのってどうよ。一応あいつも俺の存在を認知してんだから、話してくれてもいいんじゃね？

なんか、魔法使いとかと関連しているところにいたくないんだとさ、といっても一人で愚痴愚痴と言ってんのを俺が一人中から突っ込んでただけなんだが。それでなぜか日本まで行くことになった。他にも似たような組織があっただろうに。しかし雄利のやつ日本語も喋れないのにどうやって行きやがるんだろうね。まったくもって疑問だよね。しかも金とかないんで密航を重ねて日本に向かっている。もうすでに中国のどこかにいる。わずか数カ月でイギリスから中国まで密航繰り返して辿り着いているのはある意味奇跡だな。ま、今月中には日本につくだろう。しかしやっと日本語通じる相手がいるところにいけるのか。まったくなんで英語なんか喋らなきゃいけないんだ。

さて雄利が目を覚ますまで俺が進んどいてやるか。めんどい。

いいかげん雄利に精神空間に辿り着いてほしい。そうすれば俺が雄利の都合で表に出るのもなくなるんだから。はぁ。結構切実な願いだったりする。

side KYO end.

side Yuri

目が覚めたら気を失った場所とは違った場所だった。

何でだろうと思ったけどよく考えたらすぐに分かった。

「また、キョウか。迷惑かけちゃったかな」

キョウと話したのはこの間のあの事件の時だけ。それ以降こちらからは話すこともできていない。だけどキョウはボクの考えはわかっているみたいで、イギリスを出てから度々キョウが表に出て行動しているんだけど、そのどれもがボクのとるはずの行動だった。

あの事件の時ボクはキョウと精神空間にいた。あの空間にボクいまだに至っていない。どうやればいけるのかわからない。瞑想とか軽くやってみたけど、どれも成功していないところを見ると精神統一とか関係ないみたいだ。この間の時はショックで行けたみたいだしね。ま、いつか行けると信じて前に進もうか。

いまボクは関西呪術協会に向かっている。

ボクの復讐の目的は、まずあの赤毛を殺すこと。絶対に。

その過程としての必要条件が

1．実力。当然ながら、あの赤毛を殺せるほどの力
2．情報。あの赤毛がどこに行ったかわからない。いままで集めた情報によるとあの男は英雄らしい。名前がナギ・スプリングフィールド。英雄さまは誰を殺してもとがめられないらしい。まったくもって素晴らしい時代になってくれたもんだよ。
3．上の二つが提供できる組織。やはり個人でできる事は少ない。その点組織には情報が蓄積されているはず。多分。

それで組織を選び始めたんだけど、まず魔法使い関連の組織はだめだ。好き嫌いもあるけど、魔法使いってのはよほどのことがない限り互いに不利益になることをしない。まぁ、仲がいいんだよ。気色悪いほどに。それなのにボクの復讐はあの英雄さまだ。どうせ復讐なんかやめろとか言って、記憶消去でもするだろう。自分たちの都合のいいように。

それで選ぶ対象にしたのが魔法使いと敵対しているところ、もしくはいがみ合いがあるところ。そんなとき見つけたのが関西呪術協会。最近では彼らは魔法使いに一方的に突っ掛かっているらしい。これは結構重要だ。つまりぼくの復讐が魔法使いに露見するのを防ぐことができる。
しかもラッキーなことに今のトップはあの英雄様一行の一員だったらしい。もしかしたらあの赤毛の有益な情報を得られるかも。

コロサナクッチャ

ダッテ父サンヲコロシタンダカラ

コロサナクッチャ

第2話　めんどうだと思う、俺は・・・・ってね（後書き）

いまだに第2話。

なんか今回は説明だけですね。

ちょっとひどいかな。

そういえばアンケートありがとうございました。

結果としては暗殺系の武器にすることにしました。

別に一つに絞らなくてもいいかな、と。

次は羽根っ子せっちゃんが出てきますよ。多分。

あれ、マナとか出てくるの結構あとじゃね？

このかはどうしようか微妙だな。初等部からマホラなのは知っているけど、いつからなのかわからないからな。現時点で彼女らは小学2，3年だしな。

う～～ん

あといま悩んでいるのはカップリングってかなんていうか・・・

刹那と雄利、キョウと真名

刹那とキョウ、雄利と真名

どうしようかな。

誤字、指摘、質問、感想等々よろしくお願いします。

第3話　ボクと羽根っ娘ってボクはね（前書き）

久しぶりです。

なんか長文になってしましました。それに反比例するかのごとく内容は薄い。

がんばろーーーー

第3話　ボクと羽根っ娘ってボクはね

「はあああああああぁぁぁぁぁぁぁ」

「おらぁ」

――――――キンッ

「っ！【斬岩剣】」

「堕ちろぉ」

「いやぁ、いい汗かいた掻いた、ね刹那」

「はぁ、はぁ・・ど、どういう、体してんですかっ」

「どういうって、こういう体。」

「・・・な、なんで一時間ぶっ続けで試合してそんな余裕あるんですかっ」

「あれれ、刹那ちゃんもしかしてヘトヘトですか？鍛錬が足りてないんじゃないですか？」

「っう。そ、そうかもしれませんが、それでもあなたのその体力はおかしいです。」

「ま、そうかもね。でもボクについてこれた刹那もどういう体してんだよって話だよね」

「そそそそそ、それは、あああああ、あれですよ、あれ」

「ふ～ん、あれ、ね。ま、いいや。そろそろ終わりにしようか。」

「はいっ！」

――――ボクと羽根っ娘ってボクはね――――

ここは関西呪術協会の総本山。現在の長、近衛詠春の家でもある。

そこで朝から試合をしていたのは【京都神鳴流】に属している桜咲刹那と主に事務係を担当している雄利・L・レイである。

接点なんて何一つなさそうな二人がなぜ出会い、ましてや試合をするようになったのはある一つの事件に起因する。

■■■■■■■■■■■■

―4 Years ago―

関西呪術協会についた雄利達は当初の目的通り関西呪術協会に属することにした。だがここで一つ問題が生じた。キョウである。雄利としてはあまり監視の対象になることはしたくなかった。ただでさえ彼はその両腕で目立ってしまうのだから。そんななか自分からボク二重人格なんですなんて言って注目を浴びるのはごめんだった。だが当時の彼はまだ精神空間に至っておらず、いつどのタイミングでキョウがでてくるかわからなかった。また、キョウの性格からして到底受け入れられるとは思えなかった。

そこで雄利は賭けに出た。もともと彼の技術は魔物退治より暗殺に向いている。そこでまだ組織を抑えられていなかった詠春に掛け合ったのだ。

「暗殺者、欲しくないか」

もちろん汚れ役を受けるのに抵抗は無かった。もともと雄利は生まれながらにして歪んでいる。触れ合う他人といえば彼の両親だけだった。誰かにとっての世界とは自分と自分を見てくれる他人で構成される。少なくとも雄利にとってはそうだった。彼の世界はすなわち自分と母、父のみだけで構成されていた。彼の世界は歪んでいたが少なくとも存在した。だがその世界はナギ・スプリングフィールドによって壊される。

世界を壊殺されたことによって彼は激しく歪む。もともと命に対してそれほどの価値を見出していなかった彼が自身の世界を壊殺されたことにより完全に価値を見出さなくなった。

つまるところ彼が新しく形成している世界では自身を含めた人形しかいないのである。

近衛詠春が最初彼の提案を断った。彼も大戦を経験し、ましてや英雄と呼ばれた身である。組織がどういうものであるか、組織が常に闇をかかえていることわ十分に理解しているつもりだった。だからこそ自分の組織ではそのような闇を作り出さないように心がけていた。だが彼はいまだに自分の組織を把握していなかった。近衛詠春は

とにかく彼はその件については断った。そのまま雄利は現在の事務係につくことになる。だが彼は事件を機に再検討しなければなくなる。

それから一年後、事件は起こった。

最初は誰も気づかなかった。

そう、気づくはずもなかった。普段から彼らは隔離され、誰からも認められず過ごしてきたのだから。

人とは違う、それだけの理由で彼らは隔離されてきたのだから。

“半妖”

それが彼らの共通点だった。

近衛詠春の代から彼らは関西呪術協会に受けいられてきた。だが実際にはまだ受け入れの準備もできてなかった。彼らの隔離はある意味近衛詠春の準備不足により起こったのだ。

集まったのはまだ幼い半妖ばかりだった。実際には協会の入口に捨てられていた、という形が多かったが。

その半妖たちがそろっていなくなっても気づかないだろう。隔離されている場所は普段誰も近づかない。

この事実が過激派にとっては有益だった。

疎まれて隔離されてはいたものの、彼らは確実に関西呪術協会に属していた。

つまり“半妖”がいなくなっても誰も気がつかないし気にしないが、協会に属している“一員”がいなくなれば大問題になる。それが“西洋魔術師”によるものだと分かればなおのことだ。

そうして“半妖”が関西呪術協会から姿を消した。だれも気付かなかった。雄利以外は。

彼の能力【波動】。これは多様性のある能力で、たとえば達人が

気配で人を感じ取るように彼も能力を行使して疑似的に再現することもできる。それも自分の周りだけに留まらず呪術協会一帯なら人の動きを感じ取ることができる。彼は呪術協会全体を常に見ていたのである。

そんなことも知らなかった過激派は噂を流し始める。『西洋魔術師が呪術協会の一員をさらっていった』と。

だがそんな噂が長の耳に届く前に雄利はすでに真実を告げていた。同時に実行犯の過激派の抹消、半妖たちの救出を行うと言ったのだが近衛詠春は当然それを断った。

しかしそんな事実もむなしく呪術協会はピリピリとした空気が流れていた。

そして事態は一気に悪化する。だれが気付いたのかはわからないが騒ぎが起こった。

入口に半妖の子供がバラバラになって転がっている、と。

半妖は隔離されていたが誰も死ねばいいとは思ってはいなかった。とくにバラバラにされたのは子供である。子を持つ親などはこの事態を看過できなかったのだろう。一気に西洋魔術師、関東魔法協会にたいして激しい敵意を剥くものが増えたのである。

さすがの詠春もこれはまずいと思ったのか秘密裏に数人に半妖の子供たちの救出に向かわせようとしたのだが、彼は周りにすぐに使える人物がいなかった。

雄利を除いて。

「雄利・L・レイ、関西呪術協会の長として命じます。攫われた半妖の子供たちの救出。それが今回の任務です。」

「今回の、ね。わかりました。実行犯などの対処はどうすればいいのでしょうか」

「可能な限り殺さずに連れてきてください。」

「了解、では」

「君はそんなに人を殺したいのですか」

「・・・人形を壊すだけですよ。」

そのようなやり取りがあり、雄利はすぐに半妖たちの場所を探して向かった。

子供たちは小屋に押し込まれているようでさっきから壁などを叩く音とともに泣き声が聞こえる。

といってもまだ雄利とその小屋とは1?ちかく離れていた。彼の能力による恩恵によって彼は音を拾ったのである。

小屋のまわりで実行犯たち6人がトランプなどをして遊んでいた。

それなら、と雄利は，堂々，と彼らの前に進んでいき見せしめに一人の首を手刀で切り落とした。

雄利は自分から発せられる波をすで遮断したのだ。つまり彼はいま音も姿もない状態である。そして自分の腕を超振動させて切り落としたのだ。そんなことをすればさすがに切るほうもかなりの負担がかかるのだが彼の腕は竜人の腕である。耐久度は人のそれとは比べ物にならない。

首が落ち、血が噴水のように噴出し始めた。

突然のことに周りは唖然として理解できていなかったのだがだんだん理解できたのか騒ぎ出し逃げ出す。

だが雄利がそのような場合を考えていなかったわけもなく、周りはすでに彼の鋼糸が張られていた。雄利は特定の糸に超振動を起こす。それだけであるものは腕を切り落とされ、またあるものは足を切り落とされ、と一瞬で実行犯たちは戦闘不能になったのだ

「終わり、だな」

雄利がもってかえってきた、人間だったもの。全員手足が切り落とされてダルマ状態。

そのことに詠春は苦い顔をしたがとくに何かを言うことはなかった。

子供たちも救出されたが、彼らは実行犯たちの状態を見て終始泣きっぱなしだった。

そんななか一人だけずっと雄利を見ていた子供がいた。桜咲刹那当時１０歳である。

このあと詠春が事実を公表し一件落着した。

■■■■■■■■■■■■■

刹那はそれから雄利のところに来て戦いの技術を学ぼうとしたが雄利は相手にしなかった。

当然である。雄利の技術はつい最近培ったもの。刹那にくらべて雄利はまだ数年しか武器をとっていないのだから。

それでもしつこく突っかかってきたので試合ぐらいならする。という話で落ち着いたのである。

――――だいたい、なんでボクがわざわざ相手しなくちゃいけないんだ。キョウのほうが小太刀使うんだからいい相手になるんじゃないかな。――――

実は雄利は2年前から精神空間にたどり着いた。なんか適当やってたらできた、らしい。それからキョウもたまに表に出てきている。といっても知っているのは刹那と詠春だけである。

「そ、それはキョウさんだと本当の殺し合いをしなくちゃいけないわけで」

「・・・・あれ、口に出てた？」

「はい」

「なるほど、特にボクじゃなきゃいけないわけじゃないんだ。キョウがいやだからボクなだけなんだ、ウルウル（棒読み）」

「もうすこし感情こめたほうがいいですよ。」

「そう？」

「はい。それで少し前から気になっていたんですけど、雄利さんちょっと技術の進歩が速くないですか？」

そう刹那はずっと気になっていたのである。雄利の技術を磨く速さは異常なのである。たとえば初めて習った技術を次の日には平均以上のレベルまでに磨いていたりする。

「あれ？言ってなかったっけ。例えばキョウが表に出ている時間とか寝ている時間は自分の精神空間のなかで修業しているって。あそこなんか時間の流れが違うらしいしね。ま、そんな感じだね」

「な、なんですかそれは！！ずるいです。そんなことしていたら私ずっと勝てないじゃないですか！！」

「そうだね。残念ッ」

「残念ッじゃありませんよ。」

「じゃあ刹那も自分の精神空間に行けるように努力すればいいじゃない。ま、難しいだろうけどね。ボクの場合特殊だから、ほらキョウがいたし。」

「む！ぜ、絶対行けるようになって、雄利さんなんかボコボコにしてやります。」

「あらら、すねちゃった。そういえば刹那、関東のほうに行くんでしょ？」

「ええ、お嬢様の護衛を任されたので」

「あ～らら、大役じゃない。刹那ちゃんには出来ますかね。」

「・・・・・正直あまり自信はないです。3年前の事件で私は自分の仲間を守れず、結局一人は殺されてしまいました。私にはまだ力がない。それに今回の任はすこしおかしいと思うのです。護衛が私だけというのも疑問に残りますし。それに裏のことを気付かせたく

ないのならなおのこと私が行くべきじゃないんじゃないか、と」

「あの長殿はいささか過保護だからねぇ。自分のむすめに対して。まぁ、キョウいわく気付かせたくないんじゃないか？だってさ」

「気付く？何にですか？」

「『あのお嬢様は、もうそれは膨大な魔力を持って生まれてきた。それと引き換えに一つの命が失われたじゃねーか』だってさ、キョウが」

「引き換えに一つのいの・・ち・・・！！！そ、それじゃあ」

「母親の死の直接の原因はあの娘さんだってことだねぇ」

「そんな？！」

「ま、一つの仮定だけどね」

「・・・そうですか」

「どうでもいいけど、刹那道場行かなくていいの？時間的にもう始まってんじゃない」

「へ？あ。あああああああああああああああああ、また怒られるうううう」

「いやぁ元気だなぁ」

「雄利君、君に麻帆良学園までいってほしい」

「へ？」

第3話　ボクと羽根っ娘ってボクはね（後書き）

カップルは見事刹那と雄利、キョウと真名に決定です。理由適当。

雄利ですがいまだに自分の中で全体像というかキャラというか、それが決まってません。一応イメージカラーは灰色ですかね。ちなみにキョウは紫です。イラストも醜いほど紫だったでしょ。雄利のイラスト描いてくれる人わずかに募集中。（なんだそりゃ）服装とかはイメージ的にはエヴァの加持ですかね。顔ですよね。どんな感じにしよ

刹那にかんしてはいまだに羽根を見せるのは抵抗があります。なのでいまだに雄利はなにのハーフなのか知りません。タイトル？気にするな。俺は気にしない。

ちなみに刹那のなかでの雄利の位置は木乃香よりすこし下くらい。彼女がいない間は雄利にべっとりですね。

詠春はすこしひとを信じすぎる。という感じにしました。

それでアンケートです。

雄利君１６歳がマホラに行きますが彼は

1．学校に通うべきか、それともいままでどおり事務職をするか。（ぶっちゃけると魔法使いたちとＡ組連中との関係ですね）

2．刹那と仮契約するべきか（京都では知らなかった。という設定です。ちなみに作者めんどうだから本契約に直行してもいいんじゃ

ね？トか考えてます）

3．サブヒロインっている？てか誰がいいのさぁ

の3つです。よろしくお願いします。

ネタがすぐなくなる私は、こんなのやってほしいという要望を心からお待ちしております。

誤字、脱字、指摘、感想、質問などありましたらお願いします。

第４話　キョウは勉強のきょうってね（前書き）

アンケートまだ募集してます。

だれも答えてくれないｏｒｚ

あとがきにもう一回書きますのでよろしくお願いします。

第４話　キョウは勉強のきょうってね

ときどき、思うんだ。

この世界はもしかしたら、ただの夢なんじゃないかって。

本当に嫌な夢で起きたら実は父さんが殺されてなくて、

もしかしたら母さんも生きていて、

家族３人の幸せな時間がもしかしたら存在するんはないかって。

だからときどき思うんだ。

この世界を壊したら元に戻れるんじゃないかって。

目が覚めるんじゃないかって。

でもそんなことなくてボクはこの夢を見続けるしかないんだ。

――――キョウは勉強のきょうってね――――

雄利が麻帆良行きを伝えられてから数日。

刹那はあわていた。

それはもうすごくあわててていた。

彼女はまだ若い人生の中で学校に言ったことがなかったのである。

だから彼女は学校に通うことを非常に楽しみにしていた。

だが彼女は気付くことになる。

学がない、と。

「ゆ、雄利さーーん」

「ん？」

そんな彼女はすぐさま雄利の事務所に走った。

「助けてくださいっ！！」

実を言うと雄利は裏にもかかわるのでほかの事務員に悟らせないために個室をあたえられている。

刹那はここにちょくちょく訪れていた。

「助けてくださいって、なにをさ。一応ボク仕事中なんだけど」

「うっ、すいません。だけど私、雄利さんしか頼れる人がいないんです。」

「ふぅ、わかったよ。これ終わったら聞くからそこらへんでくつろいでて。」

「はい！！」

雄利の助けを得られるとわかったからか刹那が笑顔になる。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・・

・・・・

・・

仕事が終わったのか雄利が刹那の向かいの席に座る。

「それでなにを助けてほしいのさ」

「その・・・を教えてほしくて」

「？なにをさ」

「勉強を」

「それはまた刹那とは無縁そうな言葉が出てきたね。そういえば刹那学校行ってなかったもんね。今度の任務大丈夫なの？」

「うっ、それで勉強を教えてほしいんですっ！！」

「う～ん、困ったな。ほらボクも学校行ってなかったからな。教えられるのは数学と物理だけだしなぁ。どうしよっか」

「そ、そんな。ｏｒｚ」

「う～ん。そうだなぁ。あんまりお勧めしないけど方法はあるよ。」
「えっ！！教えてください！早く！」
「ちょ、ちょっとぉぉぉ」
よほど追い詰められたのか雄利に飛びつく刹那。
雄利も突然の刹那の行動に対応できず、二人ともに倒れこむ。
「・・・・ボク襲われるほうより襲うほうが好きなんだよね」
「？！○×▽■・・・・プシュ～～～」
「あ、からかいすぎた。ま、それで方法の話だけどね」
「あ、はい。どんな方法なんですか」
「キョウに教えてもらうんだよ。」
「・・・・・・・はい？」
「だから、キョウに教えてもらうのさ」
「・・・・キョウさんにですか？」
「うん、そうだよ。」
「えっと、大丈夫なんですか、いろいろと。」

「さあ？少なくとも学力に関してはボクよりあるからね」

「不安が残りますがよろしくお願いします。」

「うん、じゃ変わるよ」

座っていた雄利の体が鈍く光り出し徐々に光が増してゆく。そして光の輪郭が変わり終えると光が収まり始める。

光が消えるとそこに座っていたのは青色の気流しを着たキョウだった。

「よう、羽根っ娘。雄利からだいたいのことは聞いた。勉強教えてくださいってか」

「・・・・」

「人様を無視するとはいい御身分じゃないか、ええ」

「！！す、すいません。ですけど、毎回思うんですけど不思議な現象ですね。」

「そうか？よくあることじゃねーか」

「いや、あり得ませんから。」

「そうか？それでおバカな羽根っ娘ちゃんにはどの教科を教えてやりゃよろしいんでしょうかね」

「そ、その全部。」

「え？よく聞こえませんが？なんと仰ったのでしょうか、このおバカな羽根っ娘ちゃんは」

キョウがニヤニヤしながら刹那に問いかける。もちろん答えなどわかっているのだ。

「ッ全部ですよ。全部。ええ、そうです。馬鹿です。だからわざわざ時間を割いてまでキョウさんに教えてもらおうと考えたんです。だいたいその羽根っ娘ってのはやめてくださいって言ってるじゃないですか。ゼェゼェ」

「いいじゃね～か、別に。事実だろ羽根が生えてるのは。雄利はいまだになんのハーフだかしらねーようだけど。」

「雄利さんはまだ知らない、か。良かった。」

「なんだぁ？半妖ってばれているんだ。そんなの意味ねーだろ。」

「いいんです。意味がなくたって。」

「まあ、いいや。ただあんまりおもしろくなかったので、どうせやるならこれから毎回テスト１００点取れるくらいの学力を身につけようかァ。さあ、嫌になるほど勉強しようぜ。」

―あ、選択間違えたかも―

その日、雄利の事務室からは悲鳴が絶えることがなかったという。
あまりにも悲痛な悲鳴に誰も事務室に近づくことは無かった。

■おまけ■

「ちっ、時間がねえな・・・おい、羽根っ娘」
「！！ひぃ、ななななな、なんでしょう」
「おまえ、精神空間にいけるのか？」
「い、行けませんでございますです」
「ほう、それはまた未熟なことで。まあ、オレが連れてってやる。
よし、寝ろ！」

「へっ？寝るんですか？あの、私そんなに眠くな『あぁ？』いこともないです。はい。すぐに寝ます。『いや、よく考えたらこっちのほうが早い』へ、あ、あの、なんでそんなうれしそうな顔でこぶしを握っていらっしゃるのでしょ『早く寝ろぉ！！』・・・・キュ、キュ～」

「さてと行くか。」

目が覚めたらそこは白い空間。何処までも白い空間だった。

「ここが、精神空間・・・」

「ほう、お前の空間は白いのか。」

「！？キョ、キョウさん、ななんでここにいるんですか」

「あ、俺は特殊だからな。さて時間はほぼ無限にある。だいたいこの中での一週間は大体‘外’の一時間だからな。しかも、なんと眠る必要なし、腹も減らねぇ、体も老いることなし、となんともまあ世は貴様の味方をしているようじゃねーか。さぁ、勉強を始めよう

か。羽根っ娘。ハリーハリーハリーハリー」

「そ、そんなあああああああああああああ」

なんともうれしくないきっかけで精神空間に行くことができるようになった刹那であった。

ちなみに成績のほうだが、

キョウいわく「まあまあにはなったんじゃねーか」

雄利いわく「へぇ、すごいね刹那ちゃん」

刹那自身いわく「もうヤダ、絶対やだ。」

らしい。

ただ、たまたま様子を見に来てた近衛詠春によると

「刹那くんってたしか、中学生ですよね。あれ教えてたの全部高校、もしくは大学の範囲ですよ？」

らしい。

第４話　キョウは勉強のきょうってね（後書き）

少しだけ補足したいと思います。

雄利が数学と物理だけなら教えられるといったのは彼の能力に関係します。

彼の能力の【波動】ですが、能力が開花することにより彼の脳の演算機能が強化された。それにより彼は波動を消したりする事が出来る。つまり物理法則に乗っ取った計算や単純な計算問題ならできるのある。

そしてキョウに交代した時に服装が変わったことに関しては、精神空間が関係してます。キョウのみが行えることですが自分の所有物を精神空間まで持っていけます。キョウはキョウだけの精神空間を持っていてそこに自分の物を格納しています。そして表に出るときに自分のものを具現化できるのです。同じ要領で雄利が来ていた服は雄利の空間に送ってます。

○アンケート○

雄利君１６歳がマホラに行きますが彼はマホラで

１．学校に通うべきか、それともいままでどおり事務職をするか。

（ぶっちゃけると魔法使いたちとＡ組連中との関係ですね。さすがに教師をできませんから、雄利は。）

2．刹那と仮契約するべきか。（京都では知らなかった。という設定です。）

3．サブヒロインっている？いるんだったら誰がいいかなどを教えてください。

の3つです。できれば全部答えてほしいです。よろしくお願いします。

次回は麻帆良を舞台に話を進めます。2，3話やったら本編に行こうかと思います。

誤字、脱字や指摘、質問、批評、感想などをお待ちしています。よろしくお願いします。

第5話　オレとボク（前書き）

一応書いたんですけど、なんか・・・ねぇ？

来週には大学が始まるんで更新速度落ちるな～

第5話　オレとボク

京都駅で二人を送る形で一人の男性が立っている。
「それじゃあ長、行ってまいります。」
「いってらっしゃい、刹那君」
「あの情報は本当でしょうね、近衛詠春」
「ええ、それなら君にも行く理由があるでしょ。少なくとももう情報の出尽くしたうちよりは価値がある。」
「フン・・・行くよ、刹那」
「あ、はい」

東京行の新幹線に乗り込む。
「そういえば雄利さんと長って仲悪いんですか？」
「ボクが一方的に嫌ってるだけさ」
「はぁ」
「刹那。戦争ってのは勝ったほうが正義なんだよ。自由にできる。」
「なんですかいきなり？」
「あの近衛詠春もそうさ、戦争に勝利に貢献した英雄だからあの地位にいるのさ。じゃなかったら今頃、どこかの独房か死刑台の上だね」
「・・・・それは、・・・・」
否定しようと思うのだが、どこか否定できない。
「まぁ、言ってみればボクの愚痴。英雄が嫌いなのさ。」
「どうしてですか？」
「個人的な理由だよ」
「・・・そうですか（私には話してくれないのか）」

「・・話しても楽しくもなんともないよ。ただボクの父親が英雄様に殺されただけさ」
「え、す、すいません。」
「だから話さなかったんだよ。聞いてもたのしい話じゃない。」
「すいません・・・・・・」

さすがに気まずくなったのか黙る二人。

「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・」

「!!!」
いきなり雄利が目を見開きシャツの胸の部分を強く握る。その表情はいつものどこかウソ臭い表情ではなく本当に驚き混乱している表情だ。
「どうかしたんですか?」
刹那も雄利の行動を不審に思ったのか問いかける。
「いなくなった。」
「はい?」
「キョウがいなくなった。」
「?」
刹那にはあまり分からない答えであった。しかしそのあと雄利は口を開くことを無くただ頭を抱えてなぜとつぶやくばかり。刹那に出来るのはただ隣に付き添って落ち着くのを待つだけだった。

「ふぅ。見苦しいところ見せたね」

「いえ。」

数分して雄利は落ち着きだし深呼吸するなどして自分を落ち着かせた。

だがいまだに混乱していた。

「えっと、なにがあったんですか」

「・・・うん、ぼくもよくわかってないんだ。ただ、キョウがぼくのなかからいなくなったんだ。いきなり、ね。」

「キョウさんがですか？」

「うん、いままであったものがなくなった。そんな感じかな。」

「はぁ、それで雄利さんは大丈夫んなんですか？」

「・・・・まだわからないな。」

「・・・そうですか。」

――――――――――

そのころキョウは、

いつもの着流しを着ているが両腕がない。つまりここはどこかの精神空間。それぐらいしか予想はつかない。

それはそれで面白い。

「・・・・・・・どこだぁ、ここはぁ」

どこか見覚えのある世界。自分の穴だらけの記憶にあるあの爺をコロシタ世界。

まさか、な。

＜久しぶりじゃのうフォフォフォ＞

「・・・・あんでテメーが生きてんだよ、くそ爺。」

目の前には確かにコロシタはずの爺がいた。

＜おぬしが殺し損ねたんじゃろう＞

「おいおい、だったら殺さなくっちゃぁなあ」

瞬間的に小太刀を一本だす。腕は無い、あの時と同じように口でくわえ、殺す。

＜そんなにすげ結論をだすでない。もうわしは力などない。お主に殺されてもこうやって存在し続けるだけじゃよ＞

「・・・・・・・フン」

そういい、小太刀を消す。

「なるほどなぁ、そういうことか。テメー存在してない。殺せないな。」

目の前の爺はひどくあいまいな存在だ。いや存在はしていないのだろう。そこにいるのにいないと認識する。かろうじて俺はどうにか認識している。強制的にだ。そのためかさっきから脳に負担がか

かっているのか頭が痛い。

＜よくわかったの＞

「いつかは、こういうことが起こると思ったぜ。」

＜ほう、それはなぜじゃ？＞

「あまりにおかしすぎるんだよ。俺も雄利も。あまりにうまく出来過ぎている。」

＜ほう？＞

そうだ。キョウはずっと前から気付いていた。自分の異変。自分の周りの状況。それはどこか当然のようでだけど矛盾をはらんでいた。

自分が当然のように雄利のなかに存在していて、そして自分のおかげで雄利は存命している。それはどこか偶然のようでそれでいて必然のように思えた。

自分もそうだ。自分の中にあった能力をどこか当然のように受け止め使いこなした。雄利はショックが原因で能力に目覚めたと思っているようだが、タイミングがよすぎる。

あまりに都合よく進み過ぎなのだ。

「大方俺がコロシタテメーは偽物だろう。俺はてめえに踊らされていたわけだ。」

＜そこまで気づいたか。だが貴様がコロシタのはまぎれもなくわしじゃ。今のわしはカミとしての力もなく、存在する事すら出来ぬただの、そうじゃな、夢じゃな＞

「・・・・・・・なるほどなァ、あのとき、てめえを殺したとき、あのときに俺はてめえの血を浴び過ぎたから魂レベルから存在が変質したなんて漫画よろしくな出来事があったのかと思ったが、実際

は違ったようだなァ。俺はてめエの力をすべて奪い取った。奪い取ってしまった。あの核から俺の太刀を伝わって俺の中に膨大すぎる力が流れ込んでしまった。てめえは残った力で当初の予定通り俺を飛ばそうとしやがった。あの光の中俺は自分の身体を進化させ続けた。膨大すぎる力に俺の身体を適応できるようになァ。その進化は脳にも達して俺の記憶をところどころ消した。もちろんこのときの記憶もな。」

＜それをすべて今推察したのか。おもしろいのぉ～、ふぉふぉふぉふぉ＞

「雄利のあの能力も俺から流れ出たものだ。あれは俺が初めて表に出ることの代償ってわけだ。アイツが俺に潰されないように。まぁ、そんな必要もなかったようだがなぁ」

＜ある意味あの子供も幸運じゃったのう。＞

「・・・・・てめえは俺に何をさせたかった」

＜・・・・・貴様に殺されたわしにそんな権限は無い。殺された時点でわしはすべてあきらめた。だがお主がいいように立ちまわった。なに、結果は出た。ならもうどうでもいい＞

「フン」

＜ただ、気をつけろよ。あの青年はいつか・・・いや、どうでもいいか＞

「・・・・・・」

＜記憶が戻ったのなら、力も少しは使いこなせるかものう＞

「・・・かもな。もういいだろう。さっさと帰せ」

＜そう急かすでない・・・・・しかし、驚きじゃのう、貴様がまだ殺しをしていないとは。＞

「あまりに殺しがいのない連中ばかりだ。」

＜そうか。これで最後じゃな。もう二度と会うこともなかろう＞

「頼まれたって会いたくねえよ、てめえは。」

くそ、頭痛が止まらない。なんの得もない。ほんと損したぜ。なにも面白くなかったし。苦笑もんだな。

ーーーーーーーーーーーー

「・・・あれ？」

もどったそんな感覚がする。多分キョウが戻ったらしい。

「どうかしたんですか？」

隣の刹那が聞いてくる。

「キョウが戻ったっぽいね」
「え？もどったんですか！」
新幹線でそんな大声出すのもどうかと思うけどね。
「うん、これで一安心かな。」
この一言で刹那は安心したようだ。まったく心配性だからね

『雄利』
『うん？』
『俺らは少し対話が必要だ』
『？』
『・・・このままだといずれか俺かお前のどちらかが滅ぶことなる。』

第5話　オレとボク（後書き）

今回はこんな感じです。

もうすこしひねったほうがいいかもしれませんね。

自分の力量の低さに絶望しますね。

なんかキョウと雄利どちらが主人公だ、みたいに思いますけど。

たぶんどっちも主人公です。

ちなみにアンケートまだやってます。もう少し意見がほしいなぁ～

みたいな。

誤字脱字や指摘、感想、質問などあればよろしくお願いします。

第6話　俺がボクでボクがボク？（前書き）

書いたぞぉおぉ

第6話　俺がボクでボクがボク？

まあ、いろいろあったけど麻帆良についた。
この街はなんともドでかく無駄に物を大きく作り大きく見せようとしている。どこかアメリカに似た考えだ。でもさすがにアメリカもあんな非常識にでかい樹を植えていることは無いだろう。
さて、ここに着いたらなにかしろ、なんて言われていない。なんでも迎えをよこすらしい。つまりその迎えが来るまでボクの隣で珍しいのかあちらこちら見ている刹那は何もすることがないわけだ。しかし、埼玉に入ってから調子が悪い。正確にはこの麻帆良に入ってから。多分結界か何か張っているんだろう。まったく嫌になるな。こう、勝手に能力を制限されては。
――――――まるでボクを殺したいみたいじゃないか。
「そんなに珍しいかい？」
ボクがそう聞くと、いままで空を飛ぶ豚でも見たようにあちこちを見まわしていた刹那が、ボクが見ていたことに気づいて恥ずかしそうに下を俯く。
「その、私はいままで本山を出たことがないですから。」
そういえばそうだ。特に半妖なんてあまり立場がよくないんで外に出るなんてほとんどないだろう。そういう意味では刹那は珍しいのかもしれない。まあ、単に気に入られているから、だけかもしれないけど。
しばらくするとメガネをかけた長髪の女性がボクらを見つけたのか近づいてきた。
「京都から来たレイさんと桜咲さんですか？」
「はい」
「ええ、そうです。」
「迎えの葛葉刀子と申します。早速ですが学園長のもとに行くので私についてきてください。」

「別にいいですけどさっきから上空からこちらを見ている、アレはボクの敵と認識していいんでしょうか？」
さっきから上からこちらを見ているあの小さな影。日中なのに元気なものだ。本当あんなに観察されたんじゃたまらない。こっちはただでさえこの劣悪な環境に順応してあげようと頑張ってたところなのに。
「上空ですか？」
そ、上空。まったく、あまりに情けないその影はボクたちがみていることにやっと気付いたのかそのまま去っていった。
「あらら、いっちゃいましたね。」
「はぁ」
「ま、いいや案内お願いします。」
葛葉さんはそのあとあまり喋ることなくボクたちを学園長のところまで連れて行った。途中女子校のなかにあると知った時はさすがのボクもその学園長の人格を疑ったけど。
学園長室前まで連れてこられたあとに葛葉さんは仕事がありますので、と言ってどこかへ行ってしまった。まぁ、仕事熱心なんだろう。
コン、コンと学園長室のドアをたたくと中から入室許可が聞こえたので刹那と二人中に入っていく。

中には人間と妖怪がいた。いや、別に妖怪が学園にいてもいいんだ。人にまぎれて生きているやつらだっているわけだし。ただそれが自分の正体を隠さずしかもあろうことか学園長の席に鎮座していたんだ。それが問題なんだ。しかもメガネをかけた男もそれが当然のよう隣に立っている。
「失礼ですが、学園長はどちらで？」
「ふぉ？わしじゃよ」

「そうですか、それでは着任のあいさつといきますか。関西呪術協会所属、雄利・L・レイ、桜咲刹那、ただ今到着いたしました。」
「ふ、御苦労さまじゃ。わしが関関東魔法協会の理事の近衛近右衛門」
「ボクはタカミチ・T・高畑、よろしくね」
「・・・よろしくお願いします。」
あいさつが終わり自分の学園での処遇について聞く。近衛詠春は向こうにいけば分かりますよ、なんていつもの憎たらしい笑顔で言っていた。まったく面倒だな。
「お主は西では何をしておったのじゃ？」
「主に事務ですね。それぐらいですね。ましてや教師などできませんので。」
「う、うむ、わかった。それでは事務職のほうで手配しておこう。」
この焦りよう、まさか本当にそんなことを考えていたとはね。それから裏の話に移る。正直、こんな話キョウが聞けばいいのに。ボクじゃあまり判断がつかないや。まあ刹那に任せるわけにはいかなそうだね。さっきから縮こまっちゃっている。
『おい、雄利。おもしろいところにいるじゃねーか。ちょっと身体貸せ』
『さすがにそれはまずいんじゃないかな。ボクはまだ注目はされたくないよ』
『馬鹿だな。お前の身体のままでいいンだよ。俺がその身体に合わせればいいんだろ』
『うん？わかった』
自分という器のなかで油と水が逆転する感じでボクは意識を身体のそこに沈めていった。

■

久しぶりに外に出た。ああ、あのふざけた爺のせいであまりにわかったことが多すぎて、あまりに嫌な気分でいろいろ考えて煮詰まって俺らの身体に無断で侵入しようとしているアホを感じたのは。いいやつあたりの対象を見つけたんで雄利と交代して出てきた。後ろであの羽根っ娘の視線を感じた。

――――――ほう、俺らの区別がつくのか。

「それから学園長、さっきからボクの記憶をのぞこうとするのをやめていただきますか？」

雄利の表情、口調を張り付け、喋る。違和感しかない。はっきりいって自分がこのように喋ることはないだろう。

「ふぉ？！」

目の前で驚きやがるよくわからない生命体。あんなにあからさまにやって気づかないと思っていたのか？よっぽどのアホかバカだな。

「確かにボクは若輩の身ではありますが関西呪術協会に属する身です、このような行為は関西呪術協会への不信ととってよろしいのですね。」

「学園長！！」

さすがに隣の男もそれは問題視したようで強めの口調で喋る。

「す、すまんかったの。わしが間違っておった。本当にすまんなかった。」

別に謝ってほしいんじゃない。ただやめろと言っただけだ。そこに問い詰める、責めるといった気持は含まれていない。ただ純粋にヤメロと命令しただけだ。それが何より重要なのだ。

「それでなにか警備の話を言っていましたけど」

なんでもこの都市に魑魅魍魎や行かれた連中が現れるらしい。それらから都市を守ってもらいたいらしい。しかもなぜかそれが当然のように話している。しかも雰囲気的にボランティアらしい。

「あなたは少し思い違いをしていますね。」

「？なにをじゃ？」

「ボクと刹那は関東魔法協会の一員としてこの場に来たんじゃありませんよ。関西呪術協会の長からの直接の依頼でここにいるんです。はっきり申しますとこの年の治安維持やら平和など知ったこっちゃないんですよ」
「しかしお主たちがここにいる以上何かしら貢献してくれんと他のものに示しがつかんのじゃ。」
「まあボクたちの行動で衝突されたらさすがに責任を感じてしまいそうですね。協力はしますよ。それでいくら払っていただけるんでしょうか、その警備に関しては」
「いや、金は出ないが、これも『立派な魔法使い』になるための修行の一環としてじゃな・・」
「また思い違いをしていらっしゃる。ボクたちはそんな物になる気もありませんし必要もない。あなたがたがボランティアで行うのとボクたちがそうするのとでは価値が違うんですよ。それに少なくともボクは自分の実力を無価値だなんて思えませんしね。君はどうだい刹那？」
「えっ私ですか？そ、その・・・」
後ろで俺が喧嘩を吹っかけているのをオロオロした表情でみていた刹那はまさか矛先が自分に来るとは思ってなかったようで、驚きあまり機能していない。
「そ、そのまだ若輩の身ではありますが、自分がいままでしてきたことを無価値だなんて思いたくありません。」
「ですって、学園長。まぁボクたちは正式な報酬が出る依頼でしたら受けますので。」
ここまでやると金にがめついように見えるが別に金がほしいわけじゃない。金なら今なら山ほどある。ただ、俺らの意地だ。無価値なものはある。あるが俺らはそうじゃない。
「・・・・うむ、わかった。じゃが、お主らに金を払う価値があるかそれを見極める必要があるの、それじゃと。」
それは確かに必要だ。まあ、こっちもさすがにいきなりこれで警

備に回そうなんて言い出したら相手を疑うがな。
「そうですね。それはそちらのお任せします。」
「うむ、決まったら連絡する。」
そのあと、刹那の寮の場所を聞き俺は雄利が用意した家の場所を確認し、学園長室を出た。出ると刹那が緊張していたのか肩の力を抜き溜息を吐いていた。
「どうした、幸せが逃げるぞぉ。ハハ」
「雄利さんの顔でキョウさんが喋ると違和感バリバリですね。」
「良く気づいたな。成長したんじゃないか。けけけ。」
この後、俺らの荷物は全部ひとまとめにして俺の家に送ってあるので俺らの家に向かうことにした。女子校から出るまでの間ずっと好奇の目にさらされたがこっちが人睨みすると失せた。まあだいぶすっきりしたんで雄利と変わるか。

■

再び意識が表に浮かび上がると地図を握りながら刹那を連れて歩いている途中だった。キョウもいきなり変わらなくてもいいのに。
「あれ？雄利さん戻ったんですか？」
「うん。あはは、いや、学園長相手にキョウも無茶したねぇ。相当イライラしていたのかこっちまで聞こえてきたよ。」
「そうですか。みているこっちはハラハラでしたよ。」
「うん、それで今は家に向かっている途中かな？」
「あ、はい。なんかキョウさん途中で迷ったって言ってましたけど。」
そういいながら地図を見る。そして近くを見て自分の場所を確認する。・・・・いや、迷うもなにも反対方向だよね、これ。そう刹

那に言うと刹那がやっぱりなんて言ってた。知っていたなら言ってあげようよ、とか思ったけどさすがにキョウ相手に指摘するのは無理か。

そういいながら歩くこと15分。自分の家に着いた、といっても26階建ての高層マンションの最上階だけど。ただ職場に近くなりそうな家を選んだ結果一人暮らしには少し大きいけどここに落ち着いた。

「うわっ、高くなかったんですか、ここ」
「まぁ、金には困らないからね。ボクもキョウも」
「うわあ、金持ちのセリフですよ、それ」
「だって金持ちだもん」

鍵を開けて中に入るとリビングに段ボールが積んであった。・・・広いんだから積んでおくこともなかったんだけど。とりあえず刹那の物とボクのもので分け始めた。それで気づいたんだがボクとキョウの荷物と刹那の荷物の比率がおかしい。大体3：1なのだ。確かにボクの荷物は多いかもしれない。だけどその反面キョウは最低限しか持って来なかった。だからこの比率はおかしいのだ。

「ねぇ刹那ちゃん。荷物少ないね」
「あ、はい。その私服が少ないんで。多分ここにいるときは制服になりますから。」
「あ～。刹那ちゃん、それ汚いよ。制服だって汚れるんだからね。学校が終わったら家に帰って私服に着替えるのが普通だね。」
「えっ！そうなんですか。どっどうしましょう??」
「ま、仕方ないね。今から買いに行こうか。刹那ちゃんの入学祝。」
「そ、そんな悪いですよ」
「まぁ、いいからいいから。」

そういい部屋から連れ出して近くのデパートに行く。といっても場所はわからないから下で管理人に聞く。近くにデパートはないらしいが、服屋はそこらじゅうにあるらしい。まったくどうなってんだろうね。それで近くの服屋に入る。店頭にあったマークがどこか見覚えがあったけどまぁいっかと思い中に入っていった。正直、ボクも女の人の服はわからないんで店員に刹那を押しつけて数着のセットを頼んだ。

「彼女さんですか？」

「そうだからきっちりコーディネートしてくださいよ。」

刹那が騒いでいたけど別に他意なんてなくて、ただ個々でプレッシャーかけとけば適当なものを選ばないだろうと思って言っただけ。それでボクは適当に店内をうろつくことにした。スーツとかもあったが、今持っているので十分だしなぁ。ネクタイも数本あるからいいし、と適当に回っていたが数点欲しくなったんで勝手会計を済ました。そろそろ終わるかな、とか思ったんだがまだやっているらしい。刹那が着せ替え人形になっていた。ただやはり店員のセンスがいいのかそのどれもが似合っていたけど。

・・・・いや、女性の買い物は長いって知ってたけど、さすがにそれから3時間も待たされるとは思わなかったよ。刹那も憔悴した顔で戻ってきた。こっち見て雄利さんのうらぎりものぉなんて言っていたけど。それで会計にいくと、数着って言ったのが１０着になってた。そして値段なんてもっとぶっ飛んでいて五拾萬かかった。まぁ、十分払える額なので払ったけど。服は刹那の寮に直接送っておいた。しかしなんでこんなにかかるのかな、とか思ったらこの店高級ブランド店だったらしい。あらま、これは予想しなかったな。

店を出た時にはすっかり夜も暗くなっていた。すこしおなかが減ったな。刹那もおなかが減っていたらしく、そのままレストランで

夕飯を食べることにした。

「いやぁ食べた食べた。ボク当分外食はいいや」
「ちょっと頼みすぎですよ。身体に障りますよ」
「大丈夫大丈夫。それで刹那ちゃんは今日はこのまま寮にいくの？」
「あ、はい。さすがに今日中に入らないと失礼かと」
「そ、じゃ荷物のほうは明日送るよ。」
「あ、ありがとうございます。」

そういって別れたんだ。刹那ももうすでに寮の位置が分かっているらしくそっちに向かって行った。ボクもマンションに帰りますか、とじぶんの荷物を持って帰ろうとしたんだけど。

――――――あれ？よく思ったら刹那の物全部家にあるのに今晩どうするんだ？

ふと疑問に思ったんだ。まあどうにかするだろう、と家に帰った。

家に帰ってすぐボクの携帯が鳴り始めた。刹那からだ。

「うん？どうしたの刹那ちゃん？」
「その、寮がもうしまっていて、申し訳ないんですけど今日泊まらせてもらえませんか？」
「あらま、刹那ちゃん男二人の家に泊まるなんて大胆というか」
「ち、ちがいますっ！！」
「あはは、冗談だよ。別にいいよ。」
「あ、ありがとうございます。」

電話の向こうでぺこぺこしているのが想像できる。電話を切って、刹那が来るっていうから荷物の整理を始めたんだけど。まだ家具も買ってないから、うちにあるのは座敷布団一つだけ。

・・・・・どうしよう？

第6話　俺がボクでボクがボク？（後書き）

書きあげましたがなんかいろいろなものに影響されちゃったので文体がバラバラですね。

次は試験の話なんで短くなりそうです

指摘、感想、質問、批評よろしくお願いします。

第7話　刹那、スイッチオン（前書き）

大学が始まり、溜息の連続。
昨日なんかバイトの面接に落ちたし。
ああ、明日はいいことありますように。
更新遅くなったって見捨てないでね。

第7話　刹那、スイッチオン

朝起きると暖かい布団の中だった。
昨日は災難だった。寮に行くともうすでに閉まっていて、よくよく考えると荷物はすべて雄利さんのところに置きっぱなしだったので寮にいくのは少し愚かだったかもしれない。急いで雄利さんに電話をかけて留めてもらうことにしたが、いつもどおりからかわれた。
そして家に泊めてもらうことになったけど部屋には布団が一式しかなかったから、自分は床に寝るから、といったのだが雄利さんが布団に寝ろといつも通りにウソ臭い表情を浮かべて命令してきた。いままで命令に反してあまりいいことなんかなかったので結局私が折れるしかなく布団で寝ることに決定したのだ。
雄利さんも目覚めて朝ごはんを食べようってことになった。なったんだが昨日の買い物で何も買ってないし、冷蔵庫もないのまた朝から外に食べに行くことにしたのだ。

「あはは、昨日で外食はもういいやって言ったばかりだったんだけどね」
「本当ですよ。」
「うん、朝からマックとかじゃなくてカフェにいこうか。そこなら軽いもの食べれそうだし。」
「はぁ」

結局近くのカフェで軽いサンドイッチを食べた。

学校が始まるのは来週から。まだ春休みの最中だ雄利さんの仕事が実質はじまるのも来週かららしい。なので私は今日中に入寮して荷物をほどいたりするつもりだ。

「ああ、そういえば。力試し、今日の夜やるって」
「今日の夜？ですか」
「そ、夜。そっちのほうが都合がいいんじゃない。秘匿とかの」

そうですか、と答えてひとまず雄利さんの家にいく。雄利さんは買い物に行くと言ったのでそれについていくことにした。入寮はそのあとにすればいい特に理由は無い。多分自分が知らない世界より今は知っている世界にいたいだけだ。

結局のところ私はまだ弱いままなのだ。今は雄利さんに依存しようとしている。そのまえはお嬢様。いまだに弱いからなにかにすがらないと自分を保てない。雄利さんにいまだに自分の正体も明かせない。・・・強くなれるだろうか、私は。

■

いやあ、普通家具は第一に買うべきだった。仕方ないので今日中にすべて買う。いやあ、忙しいね。まあそろえたいのは冷蔵庫、ベッド、洗濯機、掃除機、テレビなどなど。

さてと昨日教えてもらったデパートに行き買い物を始める。

「ベッドはこれがいいかな」
「・・・いや、これって明らかにダブルサイズですよね。」
「まあね。大は小を兼ねるしね」
「いや、いらないですよ」
「いやね、部屋広いからそれに見合う大きさのものを買おうかなって。」
「はぁ」

本当に部屋が大きくて。正直迷ったけどこんな大きなサイズ、でもそうでもしないとあの家スペースが余るからな。

全部買い終わって家に全部送った。刹那はそのまま寮に向かって行った。すでに荷物は朝の時点で送ってあるのでもう届いているころだろう。

それにしても、夜まで何してようかな。新居の掃除でもしようかと思ったけど誰かがしておいてくれたのかそこまで汚くなかったしな。

・・・まあ今日の夕飯ぐらいは買っておこうかな。さてと商店街に繰り出そうか。

■

もうすでに夜。買い物は買ったはいいけどまだ冷蔵庫が届いてなくて仕方なく部屋に冷却の札とともに置いてきた。

刹那と待ち合わせて学園長に言われた世界樹の前の広場に向かう。刹那はルームメイトと仲良くなれたようで色々と話してくる。なんでもそのルームメイトも裏に関わっているらしい、なので気を使わないで済むらしい。これはまた思惑がありそうな部屋の組み合わせだねぇ。でもまあそれはそれでらくなんだろうけど。

「じゃ行こうか。そういえば刹那ちゃん頑張ってね。まあボクは全然かまわないけど刹那ちゃんの任務には差し支えそうだからね。今日の力試し。一応ある程度はできるように示さないとあの妖怪もどきが文句いってきそうだからね。こんなのじゃ孫は預けられん、とか言って」

「あ、はい。けどもうすこしオブ的なもので包みましょうよ。」

「いいのいいの。じゃ行こうか。・・・あ、忘れてた忘れてた。キョウがこれ持っておけだとさ。」

いけないいけないっと。キョウが人にものを頼むなんて珍しいなと

か思ったんだけどね。
ボクはキョウから渡された小太刀を取り出した。それはいつもキョウが使っているものと似ていた。少し長くしてあり、普通の刀のサイズとおなじくらいだ。
・・・そういえばあれからキョウはあまり表に出なくなった。キョウはなにか知っている。でもボクに教えてくれることはないだろう。それがボクたちの関係。キョウは基本的に裏でボクが表で。いつしかそんな関係になっていた。難しいことはキョウがやる。ボクは自分のやりたいことをやる。いつしかそれがどうもボクたちの関係になっていた。
「？これ、キョウさんの小太刀ですよね？」
「うん、そうだね。何も言わなかったからわからないけど。ほら、その野太刀じゃ対人戦は少し難しいでしょ？」
「はい、少し。でも一番手になじ見ますし、いきなりこれを使えって言われてましても。」
「・・まぁね、持っておくだけでいいと思うよ。たぶん、もしもの時用だと思うからね。なんか細工がされているみたいだし。まあ刹那ちゃんなら、ってか神鳴流なら使いこなすこともできるでしょ。」
「はあ、わかりました。持っておきます。」
刹那が小太刀を手に取ると目を開いて驚いていた。数回素振りしてそれからしまった。
「うんよし、準備万端出発進行」
「・・・・遠足にいく小学生ですか。」
■
キョウさんからもらった刀は妙に私の手になじんだ。それこそ夕凪と同じくらいに。それに重さも変わらない。多分密度が高いのだろう。そして何より驚いたのが刀から発せられる形容しがたい気。多分これは相当な業物と同じくらいの価値があるのではないか？などと考えていたらすでに広場についていたようだ。世界樹の前の広

場にはすでにほかの魔法関係者たちと見受けられる人たちが待っていた。中には私のルームメイトの龍宮真名もいた。結構な人数に私は少し圧倒される。

「来たようじゃの」

もっともいちばん圧倒されるのは、学園長の頭なのだが。

「それでどのような形で力を見るので？」

キョウさんほどじゃないにしろ相変わらず敬語なのに相手を敬っていない。

まぁ、それが雄利さんなのだけど。雄利さんは一見キョウさんに比べ温厚な人間に見えるが、その実誰にも心を許していない。それはたぶん雄利さんの過去に関係あるんだろうけど、私はいまだに知らない。もちろん知りたいと思うが、私も自分の過去を打ち明けずにいる。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・相変わらず弱いな。

「わかりました、それじゃ刹那」

「え？はい？」

「まったく聞いてなかったのかい、緊張のしすぎか、それとも余裕か。どちらにせよ君は今から戦わなくちゃいけないんだよ？」

「え？」

どうやら考え込んでいるうちに話が終わってしまったようだ。そして戦うのは私からしい。後ろでは魔帆良に来た時に迎えにきた葛葉刀子さんがいた。刀、しかも私と同じ野太刀を持っているから多分神鳴流の人だ。

「刹那ちゃんが戦いやすいようにとボクが交渉してたのに君はそこをきれいにスルーしてたわけだ、しくしく」
「だからもうすこし感情込めましょうって」
「努力はします。じゃ、がんばってね」
「はあ」

そういうと雄利さんは離れていった。いつも通りの軽さだ。多分この力試しも適当にやるつもりだろう。

「それでは始めようかのう」

夕凪を抜き構える。相手も抜いてすでに構えている。

「はじめい」

少々力を抜きでも最速で相手に突っ込む。

■

試合が始まった。みなさまは上からじっと観戦していらっしゃる。あまり連中と一緒にいたくはないから少し離れたところで壁に寄りかかってじっと見ている。
刹那は8割ぐらいの力で戦っている。といっても最初から10割の力で戦う人も稀だが。
あの野太刀を細腕で振り回しながら斬撃を繰り返している。
刹那の剣は神鳴流に属しながらそれから大きく外れている。それはすべて彼女が半妖だからである。もともと彼女が剣を学べるのすらも破格の待遇なのだ。それではなぜ彼女の剣はそれほど神鳴流と

違うのか。それは誰も彼女に技や極意を教えなかったからだ、教えたとしてもほとんどが最低ランクの技である。そして彼女は自分の戦闘スタイルを築いた。数少ない技で相手と戦う術を。もっとも彼女なら技を盗むこともできた。その才能の高さゆえに。

―まあ、自分で気づかないとね

刹那の剣はほとんど我流に等しい。それに加え彼女の気の運用ははっきり言って天才だ。今だっていきなり回転しながらあの細腕で相手の剣をさばいてそのまま回転の遠心力を生かした高速の斬撃で同じところを攻撃している。それは神鳴流じゃない。彼女の技だ。なのに彼女はいまだにそれを神鳴流だと思っているみたいだけど。

「やあ、君はたしかレイくんだったっけ？」
「ええ、高畑さん」
「タカミチでいいよ。それより驚いたね。桜咲さんは詠春さんから聞いてからてっきり神鳴流を使うのかと思ったけど全然違うね」
「まあ、誰も言わなかったでしょうからね。異端ですからねボクも彼女も」
「うん、でも聞いた話と少し違うかな。桜咲酸はもう少し暴れん坊だと思ってたよ」
「・・・ああ、それなら多分大丈夫ですよ。こちらでは彼女のことを知る人も少ないでしょうから」
「？」

そんな受け答えをしていると試合も終盤に差し掛かっていた。やはりというか刹那の剣じゃまだ及ばないから刹那が不利だ。だが十分実力は示せただろう。みんな試合の結果に満足だろうしこれで試合も終わると思ったころ葛葉刀子が呟いてしまった。あの禁句を。

「半妖だから、か」
「！！」
「あ～あ、あの人死んじゃいますね。」

■

先ほどから妙な剣技で攻撃してくる。学園長の話では彼女は神鳴流を使うという話だったがこれでは話が違う。彼女のそれからたしかに神鳴流を組んだことはわかる。でも使うのは先ほどから門下生が最初のほうで学ぶ技ばかり。彼女の実力ならそれより先も学べたはずだ。

思い当たるのは彼女の出生。

「半妖だから、か」

ほんの小さな呟きだった。だがそれは彼女の耳にも届いたようだ。目を見開いてこちらを見ている。明らかに動揺している。
少し迂闊だったかもしれない。これでは単なる差別と取られても仕方ない。
そんな考えはすぐに消し取んだ。
彼女の雰囲気が一変した。それは私でも出せない純粋な殺気。ただただ殺すための殺気。

そこに立っていたのは、さっきとは別人の剣士。悪鬼。

――――――ああ、本当に迂闊だ。

■

「あれは？」
「先ほど言っていたでしょう。刹那は問題児だと思ったって。それですよ」
「？」
「彼女はね、彼女を半妖といったものを例外なくぶちのめしているんですよ。・・・・いや、例外はいるか。」
「でもそれだけじゃ今の彼女の状態は説明できないんじゃないかな。正直僕も一瞬ヒヤッとしたよ」
「・・・・関西呪術協会っていうのはその性質上どうしても血を重視しすぎる。ボクは何回も言ったんですけどね。刹那を鍛え上げればそれは一流、いやそれ以上の退魔士になるって。アレはボクもできませんもん」
「・・・才能、か」
「あなたの一番無縁で嫌いな言葉でしょう？高畑・T・タカミチ。」
「・・そうだね。」

才能、それだけなら刹那は多分あの青山姉妹だって凌ぐ。それほどなのだ、彼女の才能は。彼女の我流の剣だってそうだ。我流でやるとどうしてもどこかで行き止まるのだ。だからそれを世代を超えて形にしていく。それをすでに形にしているんだから。それにアレ。アレは正直すごすぎると思う。彼女の蓄積された戦闘経験が彼女を変えるのだ。当然だ。だが彼女のそれは別格だ。アレは自分の中のスイッチを押すのだ。自分に関連するものすべてを戦闘に適応させるスイッチを。キョウもボクも一回相手をしたことがあるが、あれは近衛詠春を相手にするより厄介だった。本当に動きが変わるのだ。まだそれを使いこなすことができてないのが唯一の救いか。

――――しかしどうしたものかね。全力出さないでいいって言ったのに。誰が止めるんだって話だよね。

「葛葉さんが結構な実力者ってのはわかりましたけど、早いところ止めたほうがいいですよ。あの状態に入ると止まらないですから。それに近衛詠春も手を焼いてましたしね。」
「う～ん。そういうのは学園長が仕切っているからね。」

ドンっという音が聞こえた。葛葉さんが壁に衝突したみたいだ。刹那はいつの間にか二刀流になってとどめを刺そうとしている。

「ちっ、ほら言った。」

すばやく不可視の鋼糸を飛ばし刹那に巻きつける。幸運にも刹那の神経は葛葉に向いている。だがすぐに刹那が気づき抵抗しだす。しかも完全にこちらを敵視している。

――――まったくね、本当は不本意なんだけどね。こんなところで力を出すのは。まあ、しかたないか。

鋼糸を通して刹那の脳に特定の周波数で波動を流す。そのあとすぐに刹那は眠りだした。近くに行くとぐっすり寝てる。

「本当にやれやれだ。」

第7話　刹那、スイッチオン（後書き）

刹那って原作だと真名より幾段か弱い感じがしたんで、パワーアップ。その代わり精神面はグラグラですね。ちなみに刹那が自分の戦闘能力が低いと思っているのはかくうえとしか戦わないからですね。

そういえば自分が書いているほかの小説でふと気になった質問があって、それは主人公の声優は？っていう質問だったんですけどね。それでふと思ったんです。みなさんキョウと雄利の声優は誰をイメージしてるのかなって。教えてください。ま、だからなんだってわけじゃないんですけど。ただみなさんから見たイメージはどんな感じなのかなって思いまして。

ちなみに自分は

雄利―保志総一郎ｏｒ小野大輔

キョウ―関俊彦ｏｒ藤原啓治

・・・・なんかちょっとキョウが違うな。

次は雄利が戦闘。

質問、感想、指摘などありましたらよろしくお願いします。

第8話　メガネと壊人（前書き）

この前活動内容で更新が遅くなるって言ったばっかりだったんですが、一応書きかけがあったので投稿。

第8話　メガネと壊人

ぐっすりと眠り姫状態な刹那を運び広場から離れた場所で下ろす。どうやらキョウが用意した刀が刹那を止めたらしい。じゃなきゃあそこまでうまくいくわけがない。それほどスイッチの入った刹那は強いのだ。純粋に強いのだ。何かに特化しているわけではないのだ。強いて言うのなら殺しに特化している。ただ限界を超えた力を出すので

あちらも葛葉さんの治療に入っている。結構な傷らしく3人で治療魔法らしきものを掛けている。結果周りの人間は、葛葉さんの周りに集まるか、その原因となった刹那に敵意をむき出しにしてこちらを睨んでいるかである。

残念ながらボクは魔法という奇跡とは無縁だ。刹那を治療する術はない。だが、近衛詠春から盗(もらった)んだ符が大量にある。ボクの腕じゃせいぜい回復を早める程度だけど、刹那自身そこまで深い傷があるわけでもないのでこれで十分だろう。

「刹那は大丈夫そうかい？」

「ん？」

依然として敵意は向けられているが誰も近づいては来なかったのであまり注意を向けてなかった。だがこの女はあまり敵意がないらしく、それだけをトレースしてたボクが気づかないのも無理ない話だった。

「まあね。すぐに起きるでしょ。で、君誰？・・・さすがに学生服のコスプレは流行らないと思うよ？」

「・・・龍宮真名。刹那のルームメイトだ。」

「ふ～ん、刹那のねぇ。イロイロと成長しすぎじゃない？ほんとに

中学生かい？」
「・・・・・・・」
どうやら気にしてたらしい。ボクよりも身長高そうだしね。キョウぐらいかな。これで中学一年だって言うんだから、ねぇ？
「ま、じゃ刹那を頼むよ。ボク今からこわーいおじさんと戦わなきゃいけないらしいから」
むこうじゃさっきの高畑さんが待っている。
ボクに英雄を差し向けるとはいい根性してるよ、あの学園長（妖怪もどき）も。

■

「タカミチくん。少し皆彼等に敵意を持ち始めとる。あまり不和の種を持ち込みたくなかったんじゃがのぅ、しかたあるまい。なるべく早く終わらせとくれ。」
「・・・わかりました。」
今から戦うのは、詠春さんが教えてくれたひとりだ。刹那くんについてはいろいろ聞けたけど、彼についてはほとんど聞けなかった。・・・いや、教えてくれなかった。
詠春さんは最近変わった。呪術協会を掌握するのに力を入れ始めたらしい。しょっちゅう連絡を取り合っているわけじゃないからあまり詳しくは知らないけど。
そして彼はどうやら詠春さんの懐刀らしい。これは憶測だが。

いつの間にか彼は広場に来ていた。

「さあ、始めようよ。タカハタさん」

「タカミチでいいって言ったんだけどね」

「力試し、どうでもよかったんだけどね。あんまり長引かせるとイロイロとめんどくさそうだね。そっち、結構本気みたいだしね。」

「あはは、そこまでわかっちゃっているか。刹那くんはすこし力を示しすぎたみたいだからね。」

「ずいぶんと勝手な理由だね。そっちだろ、力を示せって言ったのは。まあ、いい。ボクはあんたが相手っていうだけでそれなりに戦う理由はある。」

これは仲良くできそうにないね。

■

「始めいっ」

合図とともに衝撃が僕を襲う。そのままに後ろに吹っ飛ぶ。意識が飛びかかっている。あごに入ったのか体も動かない。

――――ああ、忘れていたな。高畑・T・タカミチはたしか居合拳の使い手だったっけ。最近は格下だけだったからな・・・いや、それにしたって気が緩みすぎか。

「大人げないけど、速攻で終わらさせてもらったよ」

すっかり勝った気で僕に話しかけてくる。本当に僕の力を試す気

があるのか、こいつは。
やっと体のしびれが抜けてきて体が動き出すようになった。それでも立ち上がるのに時間がかかった。余裕を気取っているのか僕に手を出さないのも本当に、分相応じゃないな。

「ほんとうに、大人げないね。まったくだよ。だけどね、まだ終わりじゃない。」

さっき刹那に鋼糸を飛ばすついでに広場に糸を仕掛けておいた。不可視、それだけで誰も気づかなかった。

【旋律陣】

タカミチのまわりの糸に波動を流し込み、共振を起こし超局地に地震を起こす。
ただでさえ今のタカミチは勝った気でいる。対応ができないだろう。いや、対応してもタイムラグが起こる。だが、それを見逃すほどボクは屑じゃない。

「クッ」

すぐにタカミチがその場から離れる。脳からの電気信号をいじり足のリミッターを解除するタカミチに突っ込む。
近衛詠春が言っていた、これは瞬動とは比べ物にはならない、まるで縮地だと。まぁ、だからボクはこれをそのまま縮地と呼んでいるけど。この速さに思考は追い付かないが、演算は追い付く。ルートを決めておけば、そのルートを走る。これだと、急な攻撃に対応ができないが、どちらにしろそのスピードに対処できる相手にはそこを改良したって意味のないことだ。まあ、今は対応できない速度で僕が突っ込んできたので懐にいるにもかかわらず見失っているこ

ろだろう。タカミチの腹に手を当てる。

「戦慄せよ、【破人波】」

人には鍛えられない部位がいくつかある。その一つが内蔵だ。人である限りそこは強化できない。また、内臓は重要な器官でもある。破人波で攻撃するのはその内蔵。といっても今回はさすがに威力を低めた。いきなり殺しちゃ後が大変そうだ。

「グハッ」

タカミチが血を吐きながら後ろに吹っ飛ぶ。きちんと決めたつもりだがあちらもとっさに魔力で全身強化してたので威力が軽減されている。

追い打ちをかけるように鋼糸をとばす。だが鋼糸は途中で何かに撃ち落とされる。土埃が舞い、視界が悪く何が起こっているのか分からない。だが視界だけが僕の知覚器官じゃない。大気中に波動を流し擬似レーダーを作る。この土埃だと多少性能は落ちるがそれでも得られる情報もある。ついでに符を使い多少の傷を治す。そしてかすかに聞こえる言葉。

「左腕に「魔力」、左腕に「気」・・・・合成！」

――ちっ！咸卦法か。分が悪すぎる。

やはり最初の一撃が利いていたのかまだ膝が笑っている。さっきの一撃で決するべきだった。ボクはもともと一撃決殺型だ。

クソッ。あまり手のうちを見せたくなかったけど、このタカミチ（英雄もどき）に勝つためなら仕方ない。ボクは負けるわけにはいけないんだ。

■

「左腕に「魔力」、左腕に「気」・・・・合成！」

情けない。

大人気ない。

僕はあの時勝った気でいた。少なくとも手ごたえはあった。僕は彼をおごっていたのか？

多分そうだ。絶対勝ったと確信した。今までの経験上そうだった。

これぐらいのことをなさないとあの人たちには追いつけない。

誓ったんだ。

あの人たちに追いつくと。

同じ舞台に立つんだ、と。

だから、全力で彼を倒さなければならない。

■

【豪殺居合い拳】

拳圧が飛んでくる。腕を超振動させそれを超音速で振い衝撃波を飛ばす。

ボクが飛ばした衝撃波とあいつが飛ばした拳圧が激突し相殺する。

その後もすかさずに技を飛ばしつづけながら、やつとの間合いを詰

めていく。
腕に鋼糸を巻きつけてそのまま飛んでくる拳圧を切り裂きながら進む。そして縮地を発動させて死角に回り込み、腕をふるう
「どんなに強い攻撃だろうと当たらなければ意味がないだろう、そうは思わないかタカハタさん？」
「タカミチでいいっていっているだろう！！」
それに対し、拳圧を放ってくる。それらがぶつかり小さな爆発が起こりあいつもボクも飛ばされる。
「クゥッ！」
「チィッ」
飛ばされながらも腕に巻きつけておいた鋼糸を飛ばし足場を空中に作りやつの頭上から急降下する。
あいつは周りを警戒していた。だが、さすがに自分の上は警戒していなかったのか、簡単に後ろをとることできた。
そうして後ろからやつの頭をつかみ、
「はぁ、はぁ・・・おいおい、あんまり本気になるなよ。たかが、力試しだろうがっ！！」
そのままに地面にたたきつけた。

「・・・・悪いけど、ボクの勝ちだ。」
「はは、僕の負けだな、これは。少し油断しすぎてたかな？」
「・・・・・・・・・・・アンタは英雄でなろうと、あろうとしすぎたんだよ。なれないならなれないなりに道ってもんがあっただろうに。」
「・・・そんな道を選べたのなら、すでに選んでいるよ。・・・あの人たちのようになるんだって夢見たんだ。でもあの人たちは僕が思うよりずっと遠くにいた。力をつけるたびに実感するんだ。とっくに気づいていたんだ、努力や心構えではどうしようもないものだって。そして、いつしか夢は歪んで呪いに代わるんだよ。叶えないと決して解けない呪いにね。それに加え周りは英雄の代理を強要しだすのさ。結局僕は無視できなかったんだ、周りの声も、そんな呪いも。・・・多分、そうすることが正しかったのに。少なくともあの人たちならそうした」
「わからないよ、ボクには夢がないからね。」
「そうだね。・・・・ほんと仲良くできそうにないな。」
「何をいまさら」

僕が笑っている足でその場から離れるとすぐ後に麻帆良の魔法使いどもが治療魔法をタカミチに使い始めた。
「これで満足でしょう？あなたたちも高いところが好きな誰かさんもね」
「う、うむ。」

学園長に今後のことは明日、と告げ刹那のところに行く。近くには先ほどの、あ～、まなだったけか？まあそいつがいた。

「やあ、刹那(眠り姫)ちゃんはまだ寝ているのかい？」
「御覧のとおりさ。しかしすごいな、君は。まさか高畑先生に勝つなんて」
「先生？」
「うちの担任さ」
「・・・教師一本に絞ればいいのにさ。」
「？」

さすがに疲れた。そう思うのも久しぶりだ。
本当なんなんなんだろう。体が思うように動かなかった。てっきり最初の一撃だと思ったケド違ったようだ。刹那も少なからず影響を受けていたみたいだ。となると血かな？

まったく近衛詠春も厄介なところに送り込んできてくれたよ。

「っんん、痛っ・・・ここ、は？」
「御目覚めかい？刹那ちゃん」
「あれ、私は葛葉さんと戦って・・・あれ？もしかして、またやっちゃいました？」
「そうそう、やっちゃってくれましたよ。」
「！！す、すいません」
「ま、いいんじゃない？キョウもどうやらこれを予見して君にその刀を渡したみたいだしさ。」
「キョウさんが？」
「そ、さてと帰るかな。刹那もそのルームメイトに送ってもらいなよ。一応治療はしたけどまだ動かないほうがいいね。」
「あ、はい」

だるいな。まあ、まだ仕事が始まるまで時間があるからいいや。

「学園長サン、僕は帰らせてもらうよ」
「ま、待つのじゃ」
「これ以上ここにいても意味はないでしょう。力は示せたわけですしね。あとはあなたが決めればいい。どちらにボクが気にするようなことじゃない。あなたが僕たちに仕事を依頼するか否かはね。」
「う、うむ、じゃがの・・」
「魔法使いたちが僕を襲ったら問答無用で殺しますよ。せいぜい抑えることだね。ボクもそこまで温厚じゃない。」

どうでもいい正義感で行動されたら困るんだよね。麻帆良ではそれを行えるのも問題だけどね。

これからどうなるんだか。

第8話　メガネと壊人（後書き）

募集です。

雄利が使う技名を募集しています。
基本的に能力の【波動】に関係しているものであればなんでもウェルカムです。技の内容は書いても書かなくてもどっちでもおk。
作者が考えたのは以下のもの。
・破人波ー人の内側から破壊していく技。
・旋律陣―相手を中心に超局地的な地震を起こす。

今度こそ更新は少し遅れますね。すいませんね。

感想、意見、指摘、質問などありましたらよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3336n/

復讐鬼と殺人鬼と魔法使い

2010年12月9日11時12分発行